

新発田中学校山岳部「山岳」発刊号復刻のお知らせ(昭和22年11月2日創刊)

令和元年10月24日 事務局

S33年第十回卒の太田靖穂さんから預かりました「山岳」のワープロ復刻原稿を芝高に持ち込み、顧問の平増先生を回し、国語の渡部先生から校正していただきました。誠にありがとうございました。このたび校正が終わりましたので、発表いたします。何せ、古い原稿ですので、読み取れない文字もあります。また、不確かな部分もありますので、ご了解ください。

「山岳」については、S26年第3回卒川瀬鎮夫さんがお書きになった「山岳部のルーツ」の中で、「戦後昭和22年に校友会山岳部再発足、11月2日に部報「山岳」が発行されている。(山岳班長島井宏氏)」と印されていますので、トップページよりご確認ください。

なお、責任者のお名前が「小林兼」で途切れています。当時の部員構成から、「小林兼一郎」さんであると思われる。部報「焼峰」発刊号(昭和24年)の巻頭言で「我々は部報を発刊する」と宣言されております。



山岳

昭和22年
十一月二日
新発田中学校
山岳部発刊
責任者小林兼

発刊の辭 山岳部 班長 島井 宏

今回、四年生諸君の努力によつて山岳部の機関紙が発刊されることになったのは、甚だ欣快の念に堪えぬ次第である。

吾々五年生も発刊を企画したことはあつたのであるが糧々の事情に妨げられて遂に成し得なかつた。吾々の努力の不足を恥ずると共に四年生諸君の努力に大に感謝の意を表する。

昭和二十二年すでに十一月、山々には秋雪紫に煙つて●●●からの壯風はそろくその威力を振るい出した。

吾々五年生も間もなく卒業がせまつて来た。今年の冬は大いにスキーに出かけるつもりである。(最も四年生に計畫は一任するが)

この機関誌をして龍頭蛇尾に終わらしむることなきやう、又この機関誌によつて部員諸君の親睦の機関となり得るよう、部員諸君の御支援を期待し、本誌の発展を祈つて、簡單乍ら發刊の辭に代える。

”何故に山を愛するか“ 五年K生

山は専ら境をなすけれども人はそれらを越えずには居られない。これは登山者のたゞひたむきに高きへ高きへと憧れる登山欲を指して言つたわけではなく山のかなたに秘められた一或いは貫處にある何物かを求め様とする。熾烈な意欲は表はしたものであらう。雲雀が空高く轉つて春霞のたなびく頃に吾等は山を越えずにゐられない。眺めて飽かぬ山姿の美しさは吾等の憧憬の的である。莊嚴にして気高い山の気品は吾等に崇高なる気塊を養はしめ、その雰囲気は知らず、識らずの内に生命の無限の発展を感じせしめる故なのである。

山を讚える歌

五年

田中嘉市

一 げに巨いなる天地の大空割きて聳え立つ

●●しき山に憧憬を

抱きてつどう我等かな

二 造化の妙の美をたづね自然の園の番に酔いて

山ふところにわけ入れば

松籟既に我ら呼ぶ

三 麓をめぐるせせらぎに若き心はうるほひぬ

谷間にひびくうぐいすに

若き心はこだましぬ

四 紅葉飾る秋の山鎧雪おほふ冬の嶺

かれに寂しき風情あり

これに氣高きけしきあり

五 時候の山に美を眺め動かぬ山に偉を悟り

語らぬ山に戒を●き

秀でし山に意氣を知る

六 あく吾反る山を訪ひ樺火圍みていぎ共に

月に語りてうそぶかん

星にうたひて叫ばなん

運動会の報告

班長

本年度十月二十一日の運動會は、その前後数日の悪天候に比し甚だ恵まれた天候であつた。これと言うのも芝中生諸君の日頃の心掛けのよいためか?ハハ・・・さをとにかく、この日の各部対抗リレーに吾が山岳部が一等の栄冠をかちえたことを報告し部員諸君の應援を感謝する。来年も亦この栄冠を頂かれんことを希ひ、田島先生はじめ選手諸君に厚く感謝の意を表する物である。

山よ永遠に幸あれ 五年 杉林 正康

人未だ居住せる蒲原平野に建設の杭がうたれしより

このかた芒々春秋既に幾百年

爾来幾萬の市民と祖先を育て来し郷土の山々は●

懐かしの●●のつながりである。おゝ脈々たる越連峯

の山々よ、我等はその生々の力と美を讚えん

古は移り人は替々ともとこしいに慈愛深い父母の心を以て圍繞する山々は嚴かに移りゆくその運命を眺

め吾等の郷土を見守つてゐる

相對してはただ黙々卓然とした静けさだがここに秘

められた山靈の雄叫を聞け

おゝ親愛なる郷土の青年男女よその眞髓に接して新

しき世界恒久の平和に處する眞の自由精神を究めよ

う。今日本は歴史に前例なき非武装の平和国家の創建

に一步印したのだ

吹きつくる嵐の中より日本再建を背負ひ、ひたむきな

精進努力は誰がするのか

文化とは人類の生活をより高く、より善を、より美しくすることに他ならない

正義勤勅、研究、互尊、辛酉神律の絶対の働きを伉じ

眞底より社會精神の改革を祈りし心をあわせて文化

の進路を高きに導かう

かくて嬉しい時は山に向つて叫び、悲しい時は更に山

に向き懇へやう

故郷の山は必らず吾々の心をあく迄励まし希望を大

歡喜を興へてくれるに違いない。